『こんな夜更けにバナナかよ』――「感動ポルノ」を超える映画

孫嘉梁

中央研究院數學研究所助理研究学者

/ 台北市新活力自立生活協會常務理事

翻訳：高雅郁

初めてこの映画を鑑賞したとき、とても理不尽だと思いました。主役の鹿野さんは完全に自分の世界に生きて、他人の感受には全然気にしていなかったと思いました。しかし、このような鹿野さんには、どうしてたくさんの人々が彼の傍にいて、こんなワガママな生活を支えてあげましたか。どうして彼は入浴のとき、女性介助者の前にエロな話を簡単に口から出せましたか。どうして彼は自分の願望を叶うために、他人の重度障害者への同情と懸念を平気で利用しても、罪悪感を持たなかったですか？

2回目にこの映画を観たときに、そんなに滅茶滅茶の感覚と鹿野さんへの悪い印象は減りましたが、上記の疑問はまだ解答できませんでした。

視点を変えると、人と人との関係性は相互的であるでしょう。ですから、私が知りたいのは、どうしてこのような「自分らしい」鹿野さんを支えてあげるボランティアが存在しているのかという疑問であるはずです。これらのボランティアは鹿野さんのご両親が健在なことを知っていましたし、また、一定的な程度の危険性である介助行為――例えば、痰吸引――で何か不意なことが発生したら法律的責任を背負わなければならないリスクも知っていた前提に、どうして鹿野さんのボランティアを務めましたか。さらに考えると、もしそれらのボランティアは給料をもらっている介助者に換わったら、その「介助―被介助関係」はどのように影響を与えますか。

　　この映画が伝いたいことは、ただの重度障害者が命をかけて戦う経緯の物語ではないと思います。この映画が描きたいことは、資本主義社会における想像しにくい人間関係とその繋がりだと思います。

「鹿野家族」という誇りのアイデンティティは、単純に金銭だけで買えますか。「障害者を介助すること」は「無給の美徳」だとするべきとは思いません。私はこの「無給の美徳説」には非常に反対します。何故というか、このコンセプトに従う人々は、容易に「被介助者」を救済されるべき「客体」と思うはずになってしまいますから。このような思いを抱えている人は、最終的には映画の中に電話をかけてきてボランティアを辞める人のように、鹿野さんは「人生を楽しく暮らしている」から、救済する必要がないと思うべきになるでしょう。代わりに、私たちは考えるべきなのは、どういう状況で障害者を支える介助者は、物質的な報酬以外のやりがいがもらえるのかということでしょう。そのやりがいは例えば、映画の中に、美咲さんは気管切開された鹿野さんが一生懸命努力して、ようやく自分が生きるためにただ一つの武器――話すこと――を取り戻す瞬間を見た時の言葉にいえない感動であります。

人間が自分なりに生きることを支えてあげることと、ハイテク産業チェーンで商品を生産の過程でネジのように担当することとは、どちらに価値があるのか、その答えは人によって異なるでしょう。

　　もし政府が十分な資源を投入するなら、重度障害者は親に頼らず、自分の個性に従い自分なりの生活ができ、夢も追求でき、社会から私たち障害者へのスティグマを破れるなら、私たちの介助者も自分の仕事の価値と意義をもっと感じられるでしょう。実は、我が国の法律で「障害者は健常者と平等に社会参加する」という原則に本気で従って、資源を投入すると、「障害者の生活を支える」ことはずいぶん飯を食える仕事になれると思います。

　　また、映画の中に、鹿野さんの情欲と官能的な需要も堂々に述べられました。その中にあるシーンは、私がよくわかりません。どうして鹿野さんはボランティアの田中さんに一緒にポルノを観ることを要求したのですか。もうしかして、このシーンは観客に考えさせたいのは、ぎこちないことを避けるように、社会全体には障害者の情欲と官能的ニーズを回避すべきなのかということでそう表現したいでしょうか。もしかして、わざと回避することがさらにぎこちないでしょうか。自分の情欲を好きな人を追求するモチベーションに転換することがノーマルと言えるなら、自分の生理的ニーズを自分で解決する選択もノーマルとは言えるでしょう。田中さんは隠れてマスターベーションすることができるけれど、鹿野さんはこの選択肢を持てましたか。好きな美咲さんが偶然に本棚でエロ雑誌を見つけた際に、鹿野さんは「あれは他のボランティアさんが残ったもの」と言いましたが、割と美咲さんのほうは正直に「重度障害者は性欲があるのか？」という疑問を聞きました。鹿野さんは医学的なぽいことを答えました。その答えは美咲さんに自分の質問は馬鹿馬鹿しい感じをさせたようです。なら、世の中に多数の人々が「重度障害者は性欲があるかどうか」との疑問を持つこととも美咲さんのように馬鹿馬鹿しいでしょう。或いは、「目をつぶる」といういい加減の態度でこの人間の基本的なニーズを対応していますか。

映画の中に、もう一つ面白いシーンがあると思います。それは、田中さんは鹿野さんの代わりに、自分の彼女美咲さんにラブレターを書いて、さらに、美咲さんが鹿野さんと一緒に出かけてほしいというシーンです。田中さんは彼女を利用して鹿野さんに哀れみを送ることが気づかなかったですが、利用された美咲さんは最初のタイミングに「自分が彼氏からほかの男に売られた」と感じました。主流社會に人と人を交際するとき、交際相手の「条件」を配慮して、その人と付き合うかどうかという潜在的なルールがあるでしょう。田中さんは自分がその潜在的なルールにも影響を及ぼされることを気づかなかったでしょう。なので、鹿野さんはいくら美咲さんが好きにしても、鹿野さんは自分（田中）と美咲さんの恋人関係には威迫されないと思うでしょう。一方で、田中さんは美咲さんが医学生と合コンのために、自分（美咲）が大学生だとウソつきのことが分かった時、いったい、自分（田中）が「美咲さんという人が好きですか」或いは「美咲さんが嘘つきの身分（大学生）が好きですか」と分からなかったでしょう。そして、自分の焦る気持ちを「両親に嘘つき」との心配に転嫁しました。このふうに、恋人関係への試練を「誰が先に嘘つき」の問題に単純化されてしまいました。美咲さんは「理想の相手」と知り合うために自分の身分を偽装しました。けれども、田中さんは「意識高い系」のコンフォートゾーンから抜き出さたくないため、「美咲さんが嘘つきなのを責める」という手段を使ったうえで、自分の心が明らかにできず事実から逃げました。人間は目的を達成するために、ある程度で自己中心の世界に生きる必要があるはずでしょう。美咲さんにとって、彼氏の田中さんより、鹿野さんのほうは自分の感情ニーズを満足してくれるでしょう。美咲さんはいったい鹿野さんに惚れたかどうか、解明できないかもしれません。但し、田中さんは美咲さんに「善意を送るように鹿野さんとセックスまでしでもよいのか」と皮肉して、美咲さんが「それが本気の愛ではないのか」と反論したとき、田中さんにはようやく三人の関係は潜在的な恋の三角関係になってしまうとわかってきました。そこに、美咲さんがそのことを言うまでは、田中さん自身の劣等感で作った優越感の障壁を壊れることにも望んでいたでしょう。

鹿野さんは「高度な自分のみの世界に生きている人」ということを私は否認しません。このような性格は、「身体の機能」と、「人生の目標」、「社会の制度」との三者から構成されたのでしょう。24時間、他人の手足を使って介助が必要な障害者が、公的な措置制度がほぼなかった社会に生きていた鹿野さんは、自分が設定した目標――他人と同等的な自主性を確保すること――を主張し、実践していました。このような鹿野さんは、母親に気が咎めるためこの一生を介護に埋め込んでしまうことを望んでいませんでした。そして、こうして実践していた鹿野さんがこの社会に証明したいことは、たとえ24時間介護が必要な人としても、重度の障害者も（入所）施設に頼らず、親元に頼らず、生きていけるということでしょう。多数の非障害者にとって、それが人生に合理的な期待でしょう。しかし、鹿野さんにとって、そのような目標を達成するために、常に挑戦を受け入れなければなりません。にもかかわらず、無数の争い、介助者の取り替え、また切磋琢磨を経て、鹿野さんはボランティアが臨時的、直前に立ち退き、即時に取り替えなければならない混乱と不安感を直面しなければなりません。そして、泊まりのボランティアが疲れるから生み出した情緒も耐えらなければなりません。

　　この映画は「励まし」の元素も含まれますが、「リアリティ」はこの映画が伝いたいポイントだと思います。鹿野さんが複数の困難を克服し退院した後、「自立生活」に戻るパーティーで、突然に美咲さんにプロポーズのシーンに私は引っかかりました。「美咲さんとずっと一緒にいたい！」は本当の気持ちですが、「命の勇者」としては願望をいつも叶えることができないのは現実の人生でしょう。プロポーズを拒否された苦しみを味わうと同時に、鹿野さんは自分が美咲さんの心に「偉大なる重要な存在」という位置づけをわかってきました。自分の命を失うリスクをかけて、田中さんと美咲さんが仲良く戻るため、車いすから転んだことを選びました。そこから、ワガママに見える鹿野さんは、実は「重要な他人」の幸せを気にしている証拠ともいえるでしょう。

この映画と原作の内容は、事実とフィクションの比率を、とにかく問いません。ただし、この文学作品は重度障害者の真実の生活を見せました。私たちは功利主義思想の制限から飛び出せるなら、鹿野さんのような命はこの社会とどのような絆につながっているのかが見えてくるでしょう。我々がこのポイントを見えてくるなら、もしかして、障害者の自立生活を支える各種の措置は「ただの人権保障」のための資源の無駄遣いを思われないでしょう。逆に「人権」のコンセプトは人類の文明社会にどのような啓示を及すのかを考えていくでしょう。生産性が人類史上前例のないピークに達した時代に、どのような社会制度は人々の自主性を保障すべきながら、人間関係疎遠が生み出す孤独と不安感を解消できますか。もしある社会制度が重度の障害者が尊厳と自主性を持つ生活を支えるなら、誰でも遠慮せずに自らの夢を追求できるでしょう。

　　誰でも尊重されて、安心・安全な社会で生きる制度は、台湾の財政には本当に受け持てないでしょうか。それは、もしかして、資源分配の課題でしょう。

【孫嘉梁（スン・ジャーリャン）】プロフィール（訳者補足）

1981年に台湾新北市（当時は「台北県」）に生まれ。1999年に臺灣大學に入学し、情報システム工学科と数学学科の二学位を取り、学士として卒業した。その後、同大学の情報システム工学研究科に入学、修士を取ってから、公費留学奨学金をもらい、2006年8月にアメリカへ渡航、留学した。七年間に経て、2011年6月にテキサス大学オースティン校（The University of Texas at Austin）に数学博士学位を取った。同年に中央研究院（台湾における最高級の研究機構）数学研究所に就職し、助理研究員として務めている。

生まれたとき、医療ミスのせいで脳酸素不足になり、脳性麻痺者としての人生が始まった。肢体不自由とともに言語障害も持つ。バリアフリーの欠如で、大学3年生前半までに母親が付き添いで学生生活を送った。大学3年生の後半に、福祉車両を利用し、通学生活が始まった。大学4年生になった時、電動車いすを使い始め、自主的に移動ができるようになった。アメリカに在住した際に、テキサス州の交通環境は台北より不便なので、両親に頼りの生活に戻った。当時、ある機縁で台湾の障害者運動団体と知り合って、アメリカの障害者運動団体（ADAPT）のテキサス支部にも参加し始まった。その時、「自立生活」の理念と認識してきた。その経験から障害者の権利について関心になった。

2011年にアメリカから帰国した際に、30歳の誕生日に総統府の前の「凱達格蘭大道」（路名）にて、「論語」に孔子が言った「三十而立」の言葉を借りって、「自立生活宣言」を誓った。当日に、十数名の障害者同士と同行して、政府に介助者制度を導入と同時に、公的措置のホームヘルパーの利用時間数制限を緩和する要求を出した。孫氏は親に頼らず、家に住み込む外国人介護労働者に頼らず、入所施設に頼らず、自主性を持って自分らしい生活を望んでいる。近年に、社会環境のバリアフリーや介助者・ホームヘルパー制度などの課題、また、障害者の性権のアドボカシーもしている。